

形態実習VI（臓器の異常）

Practice of Human Morphology VI (Abnormality of Organs)

シリーズ責任者：病理学（診断病理） 教授 小池 淳樹

1. 実習概要・学習内容

1) 総論

今までに学んできた疾病知識を、病理学総論事項より整理見直した上で、各臓器の疾病を肉眼的ならびに顕微鏡的観察方法を使って形態異常の姿を把握し、その知識を深める。同時に機能面（臨床的事項）との関連をつけながら疾病概念を学んでいく。

2) 各論

その日に観察する臓器の疾病に関連する病理学総論をまず学ぶ。次に実際の肉眼写真とプレパラート標本についての説明がなされる。配布されている標本の説明が記載されたプリントで観察のポイントを理解し、今まで講義されてきている「人体と構造と機能」、「マクロ形態実習」、「組織実習」コース別の臨床講義等を基盤として自らが考え、またはグループで検討しながらミクロ形態実習を学んでいくようにする。

学習の進め方は、まず各人で観察を行い、白紙のプリントに観察した図と必要事項を記載する。必要に応じてグループでディスカッションをして問題点などを話し合う。解決できない問題が生じた場合には、担当教員にサポートをしてもらい、解決を図る。このようにして積極的なミクロ形態実習の学習を進めてもらう。実習終了前に、その日に行われた実習内容の理解度を担当教員によって評価を受ける。

配布されているプリントは、ファイル形式となっているため、自ら観察した図と必要事項を記載したプリントをまとめて実習書を完成させてもらう。実習を通じて完成されたプリントの実習書は、自分の習熟レベルの評価となる。

2. 到達目標

1) 一般目標（GIO）

- ① 形態学的視点から「疾病とは何か」を認識する。即ち、病因論、退行性変化（代謝障害）、循環障害、炎症、免疫、感染症、進行性病変、腫瘍の原因、機序、形態的变化を知る。
- ② 各臓器に生じた病変の個体に及ぼす影響について各論的に理解する。
- ③ 病変と機能の相互関係を理解し、臨床の学習に病理学の理解がその基礎となっていることを知る。
- ④ 疾病の診断に、生検、手術材料の検索が最終診断になることを知り、必要な病理学的方法を理解する。

- ⑤ 医学、医療の進歩に剖検が重要であることを認識し、病理学的検索の基本を身につける。
- ⑥ 献体された故人、遺族あるいは提供された病者の意志を尊重し標本に対して敬虔な気持ちを養う。

2) 行動目標 (SBO)

- ① 積極的態で臨む。
- ② 実習室で学習する。実習では常に教科書、参考書(組織学の参考書も含む)を持参し、更に深く自ら学んでいく。そして細部にわたり枝葉を实らせる努力をする。
- ③ 参考書は指定しないが、必要なものについてはその都度教員が紹介する。

3. 学習上の注意点

以下の点に留意すること

- ① 積極的態で臨む。
- ② 実習室で学習する。実習では常に教科書、参考書(組織学の参考書も含む)を持参し、更に深く自ら学んでいく。そして細部にわたり枝葉を实らせる努力をする。
- ③ 参考書は指定しないが、必要なものについてはその都度教員が紹介する。

4. 教科書・参考書

教科書：『標準病理学』(医学書院)：基礎的なことから幅広く学習できる

参考書：『組織病理アトラス』(文光堂)：カラー写真が豊富

『カラーアトラス 基礎組織病理学』(西村書店)：カラー写真が豊富

『人体病理学』(南江堂)：基礎的なことから幅広く学習できる

人体解剖学・組織学教科書(各自のものを持参)

5. 成績評価

1) 総括的評価

形成的評価と併せ実習ノート、実習態度、出席等を踏まえて、総合的に評価する。いずれも基本的な事項の理解と共に積極的な実習態度が重要である。

2) 形成的評価

- ① チューターにより、肉眼所見の自己評価報告用紙とプレパラート標本の図・説明等により、理解度が評価される。
- ② 期末に試験が行われる。病理学の総論的、各論的知識の理解に加え、肉眼標本、顕鏡標本の所見、診断を含めた試験を行う。

下記の評価項目を総合して総括評価する。

評価項目	実施回数	評価割合	備考
定期試験	1	70 (%)	後期期末
実習ノート評価	3	10 (%)	後期期末・実習中
授業態度		20 (%)	

6. オフィスアワー

所属	役職	氏名	時間	場所	連絡先
病理学	教授	小池 淳樹	原則として 木曜日 15時～17時	医学部本館 1階 病理学教室医局	3140 (内線)